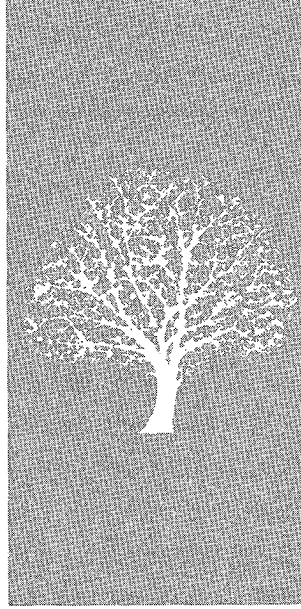


【第3章】

中医学の生理観



[学習のポイント]

- ①——気・血・津液の基本概念と機能を知り、その相互関係を理解する。
- ②——臓腑と気・血・津液を関連させて理解する。
- ③——各臓腑の生理機能を知り、それが疾病観を理解する基礎であることを認識する。
- ④——臓腑間の生理的な協調関係を理解し、それと病理、病証との関連性に注意する。
- ⑤——各臓腑と特定の関係にある組織器官を把握する。
- ⑥——経絡学説の特徴とその内容を理解する。
- ⑦——臓腑と経絡との関係については、とりわけ針灸臨床の基礎知識としての角度から、その重要性和関連性を理解する。

中医学は、臓腑・組織器官の解剖形態学の面においては、いくぶん具体性を欠いている。一方、各臓腑・組織器官の生理機能の理論面においては、独自の体系をもっており、独特な機能理論を展開している。それらの理論は臨床面で有効に生かされている。その主要内容には、気・血・津液、臟象、経絡などの学説がある。

第1節 ● 気血津液

気・血・津液はともに人体の生命活動を維持するための重要な物質である。これらは水穀の精気から作られる。気・血・津・液はそれぞれ別の物質であるが、4者は互いに化生しあい、協調しあっている。これらは臓腑・経絡を機能させるための基礎物質であり、また一方臓腑・経絡の生理機能によって生産されるものでもある。

気・血・津液学説は、中医基礎理論の中でも重要な位置を占める。

① 気

中国古代哲学の根幹をなすのは「気思想」であり、気は中医学においても重要な用語として用いられている。気については、古来さまざまな解釈があり、これを一元的に定義することは難しい。しかし現在、中医学では気を物質としてとらえるのが趨勢となっている。この物質は、世界を構成するもっとも基本的な単位であり、宇宙に存在するすべての事物を自らの運動・変化によって創出する基礎的な要素である。

人体もまた、天地の気を受けることによって生成される。また人の生命活動においては、気という物質は重要な機能を担う。人体中の気は、その担う機能、運行経路などによっていくつかの種類に分類される。以下に紹介する。

1 気の種類とその生成過程

人体における気は、分布部位の違いとその来源や機能の違いにより、元気・宗気・営気・衛気などの名称がつけられている。

【1】元気

元気は「原気」、「真気」ともいわれる。これは最も重要で基本的な気である。元気は主

として先天の精が化生したものであるが、出生後は水穀の精微によって継続的に滋養、補充されている。

元気は三焦さんしやうを通じて全身に分布しており、内は臓腑から外は腠理・肌肉・皮膚きにくにいたるまで、いたるところに行きわたっている^①。人体の各臓腑・組織は元気の作用を受けて、各々独自に機能している。この意味から、元気は生命活動の原動力であると考えられる。元気が充足すればするほど、臓腑・組織のはたらきは活発になり、身体しんたいの健康は保たれて、病を受けつけにくくなる。逆に先天の元気が不足していたり、慢性病によって身体を消耗すると、元気の作用は衰え、種々の疾病を生じる原因となる。

【2】宗気

宗気は、肺に吸入される清気と、脾胃の運化作用によって生成される水穀の気とが結合することによって生産されるもので、胸中に集められる。宗気には肺の呼吸作用と心血の運行を推進する機能がある^②。さらに視る・聴く・言う・動くといった各種の身体機能とも関係があり、このため「宗気」を「動気」と呼ぶこともある。宗気が不足すると、呼吸が浅く短くなり同時に声音も低く力感がなくなる。さらにひどくなると血脈の凝滞^③〔流れが滞ること〕や身体の動作に力が入らないといった症状が現れる。

【3】営気

営気は主に脾胃で作られる水穀の精微から化生したものであり、水穀の気の中でも比較的豊かな栄養分をもった物質である。営気は血脈中に分布しており、血液の一部分として循環することによって、全身に栄養を供給している^④。営気と血は一緒に脈内を走行しており、密接な関係があることから、「営血」と呼ばれることが多い。

【4】衛気

衛気は主に水穀の気から化生したものである。人体の陽気の1つであることから、「衛陽」ともいわれる。衛気には活動性が高く、動きが速いという性質がある^⑤。衛気は脈管に拘束されず、経脈外をめぐっており、外は皮膚・肌肉から内は胸腹部内の臓腑にいたるまで全身にくまなく分布している。

衛気には、肌表を保護して外邪の侵入に抵抗する、汗腺を開閉することにより体温調節をはかる、臓腑を温煦する、皮毛を潤沢にするなどの機能がある^⑥。

このように気は人体のさまざまな部位に分布している。その生成の由来を総括すると腎中の精気、水穀の気、および自然界から吸入する清気の3つにまとめることができる。

腎中の精気は、父母からさずかり腎中に蔵される先天の精気である。水穀の気は、脾胃で消化吸収される飲食物から得られる後天的な水穀の精気である。言葉の似ている清気は自然界に存在し、肺を経て体内に吸入されるものを指す。

したがって気が体内で十分に生成されるか否かは、先天の精気の充足度、飲食物の栄養の多少、肺・脾・腎の三臓の機能が正常か否かにかかっているといえる。なかでも脾胃の

受納^{じゅうのう}と運化作用が最も重要である^②。

2 気的作用

気は人体に対してきわめて重要な作用をおよぼしており^③、さまざまな部位に分布している。また気は、その種類によってそれぞれ独自のはたらきをもっているが、それらの主な作用を概括すると、次の5つにまとめることができる。

【1】推动作用

人体の生長・発育、各臓腑・経絡の生理活動、血の循環、津液の輸布は、すべて気によって推動されている。気虚となり推动作用が減退すると、生長・発育の遅れ、臓腑・経絡の機能減退、血行の停滞、水液の停留など各種の病変が現れる。

【2】温煦作用

全身や各組織を温める作用である。人体が正常な体温を維持することができるのは、気の温煦作用の調節を受けているからである^④。気の温煦作用が減退すると、畏寒怯冷〔異常なほど寒がる〕・四肢の冷えなどが現れる。

【3】防御作用

気には肌表を保護し、外邪の侵入を防ぐ作用がある^⑤。また外邪がすでに人体に侵入してしまった場合、気はこの病邪と闘って外へ追い出し、健康を回復させるようにはたらく。

【4】固摄作用

気の固摄作用とは体液が漏出するのを防ぐ作用で、血液が脈管の外に溢れないよう制御するはたらき、汗や尿の排出をコントロールするはたらき、あるいは精液を漏出させないようにするはたらき、などを指している。

【5】気化作用

気化という言葉には2つの意味がある。1つは精・気・津・血のあいだの化生を指す。例えば精は気に化し^⑥、気は血に化す。この作用を気化と呼んでいる。もう1つは臓腑のもつある種の機能を指す。例えば膀胱のはたらきである排尿作用は「膀胱の気化」^⑦と呼ばれており、三焦のもつ水液代謝作用は「三焦の気化」と呼ばれている。尿・汗などの物質の産生と代謝に関与する作用である。

以上、5つの作用はおのおの異なった性質をもちながら、互いに密接に関わりあい、相互に助けあって作用している。

3 気の運行

人体の気は、高い活動性をもった精微な物質であり、絶えず動いて全身をめぐる。

その運動形式は気の種類によって異なる。気の運動の基本形式は「昇・降・出・入」の4種であるが、これは人体の生命活動をシンボリックに表現したものである^⑧。気の昇降出入の停止は、生命活動の停止を意味している。

『素問』六微旨大論にあるように、「出入がなければ、人体の成長・発育・老衰もありえない。昇降がなければ、生成されたものを体に収蔵することができない」のである。

昇・降・出・入という表現は、臓腑おのおのの機能、さらに臓腑間の協調関係を具体的に説明する言葉でもある。例えば肺は呼吸を主としており、宣〔宣散作用。全身に散布するはたらきをいう〕と降〔肃降作用。静かに降ろすはたらきをいう〕の作用があり、吐故納新〔古い気を吐き、新しい気を納める〕を行っている。また臓腑間の関係としては、肺は呼吸を主り、腎は納気を主っている。心火が下降するのに対し、腎水は昇り、脾気に昇の作用があるのに対し、胃気には降の作用がある。

このように臓腑おのおのの機能が協調的に作用しあっていれば、すなわち臓腑の気の昇降出入が相対的にバランスよく行われていれば、正常な生理作用を維持することができる。

ところが気の運行に滞りが生じたり、乱れて逆行したり、昇降出入がうまく行われなくなったりすると、五臓六腑や身体の上・下・内外の協調関係と統一性に影響がおよんで種々の病変を引き起こす。例えば、肝気鬱結・肝気横逆・胃気上逆・脾気下陷・肺失宣降・腎不納気・心腎不交などは、気機の失調によっておこる病証である。

【出典】

- ① 『靈樞』刺節真邪篇：「真気者、所受於天、与穀気併而充身者也。」
- ② 『靈樞』邪客論篇：「宗気積於胸中、出於喉嚨、以貫心脈、而行呼吸焉。」
- ③ 『靈樞』邪客篇：「宗気不下、脈中之血、凝而留止。」
- ④ 『素問』痺論篇：「營者、水穀之精気也、和調於五蔵、瀉陳於六府、乃能入於脈也、故循脈上下、貫五蔵、絡六府也。」
- ⑤ 『素問』痺論篇：「衛者、水穀之悍気也。」
- ⑥ 『靈樞』本蔵篇：「衛気者、所以温分肉、充皮膚、肥腠理、司開閤者也。」
- ⑦ 『靈樞』五味篇：「故穀不入半日則気衰、一日則気少矣。」
- ⑧ 『難経』八難：「気者、人之根本也。」
- ⑨ 『難経』二十八難：「気主煦之。」
- ⑩ 『素問』評熱病論篇：「邪之所湊、其気必虚。」
- ⑪ 『素問』陰陽応象大論篇：「精化爲気。」
- ⑫ 『素問』靈蘭秘典論篇：「膀胱者、州都之官、津液蔵焉、気化則能出矣。」
- ⑬ 『素問』六微旨大論篇：「昇降出入、無器不有。」